

抽選と自律

福家佑亮(東京大学)

近年の哲学的な民主主義研究における重要な研究動向の一つはくじ引きへの着目である(Guererro 2014; Landemore 2020)。ハーバーマスによるコミュニケーション理論を源泉とする熟議民主主義研究を含め、これまでの民主主義研究は、選挙をどれだけ重視するかには違いはあれども、選挙と民主主義を不可分なものと考えてきた。しかし、最近の民主主義研究では、こうした選挙中心的な民主主義観に変化が生じつつある。市民の政治参加を促して民主主義を活性化するため、国会議員等の公職者を市民一般からくじ引きで選出するくじ引き民主主義(あるいはロトクラシーとも呼ばれる)が、急速に注目を集めているのである。公共的意思決定にくじ引きを利用するというアイデアは、無作為抽出された市民が熟議を介して政策課題に取り組むミニ・パブリックスの実践を通じて、現実の政治においても年々存在感を増しつつある(OECD 2020)。

以上の背景の下、取り組むべき研究課題として浮上しているのが選挙とくじ引きの比較である。より具体的に述べれば、民主主義が実現すべき理念や価値——たとえば自由や平等——に関して、選挙とくじ引き、それぞれがどのような価値の実現にどの程度寄与するかを分析する必要性が生まれている。というのも、こうした作業を通じてくじ引きが持ちうる機能や効果を明確化して初めて、選挙と分かち難く結びついているように思われる民主主義に、あえてくじ引きを導入する意義が明らかになるからだ。こうした選挙とくじ引きの比較の文脈の中で、近年くじ引きに向けられている重要な批判が「自律に基づく批判 (autonomy objection)」である。この批判は、選挙の代わりにくじ引きが用いられるくじ引き民主主義の下では、投票という政治的意思決定に影響を与える重要なチャンネルが閉ざされてしまい、市民の自律的な意思行使の機会が失われてしまう点でくじ引き民主主義には問題があるというものだ (Rostbøll 2015; Wilson 2021)。この批判が正しく、また、市民による意思表示の機会の保障を民主主義の必要条件と考えるのならば、投票による意思表示の機会を奪うくじ引き民主主義は、そもそも民主主義と呼べるかどうかすら疑われかねない。

本発表の目的は、こうした「自律に基づく批判」からくじ引き民主主義を擁護することにある。本発表は以下の内容を予定している。はじめに、くじ引き民主主義下において、市民が政治的意思決定に影響を与える経路について分析を行う。具体的には、市民として政治的意思決定に影響を与える経路に関して、公職者として選出される側面と公職者を選出する側面の区別が重要であることを指摘する。そして、この区別に基づいたうえで、公職者を選出する側面(選挙権)に関しては確かに「自律に基づく批判」が当てはまるが、公職者として選出される側面(被選挙権)に関しては、必ずしも「自律に基づく批判」は当て嵌まらないことを指摘して、くじ引き民主主義の擁護を行う。